元初臨済僧海雲寺印簡の活躍

阿部肇一

一　はじめに

金代の仏教が、宰相耶律楚材の信仰した曹洞宗万松行秀の活躍により、華北に曹洞禅が拡大し、南宋の臨済宗と対比される程になっていたことは周知[1]のことである。これら従来の歴史的な経過からみた禅宗の展開は、唐代の華北の北宗禅（神秀派）系統と華中、華南の南宗禅（慧能派）系統の展開があり、やがて武宗の会昌の大廃仏事件の発生以後五代、宋初にかけて慧能派の南宗禅系統の全盛を迎え、その五派七宗の中でとくに臨済宗、雲門宗の僧侶がとくに活躍をした。北宋では臨済宗の黄龍派が、また南宋では臨済宗の楊岐派が政治的な接近が目立っていった。曹洞宗も宗派としての独特の充実した修行体制を整え、教化してきたが、政治的展開としては余り目立つ活動はしていなかった。九華山（安徽省）や天童山（浙江省）普陀山（浙江省）[2]における民衆への教化信仰は曹洞宗の地盤も地道に確立していたことを物語っている。

金朝は貞祐二年（一二一四）に成吉思汗との間に講和を結んだが、宣宗は不安のため汴京に遷都したため、怒ったチンギスハン（成吉思汗）はムハリ（木華黎）をして中京を奪わしめた。その時右丞相完顔承暉は自殺したが、捕虜の中に遼人耶律楚材の博学多識なる者を見出し、やがて成吉思汗の幕臣として、蒙古開国への大きな足跡を残す位の地位となったのであった。一二二七（南宋理宗宝慶三年、金正大四年）に成吉思汗の死後第三子オゴタイが即位して太宗となり、金朝の攻撃を開始し、一二三四年（南宋理宗端平元年、金天興三年）にはこれを滅亡させるに至った。これ以後蒙古は定宗、憲宗を経て、フビライ

（忽必烈）が即位するに至って以来、南宋が滅亡するに至る間は、これらの地にあって蒙古の宗教政策は寛大であった。耶律楚材の信仰を得た禅宗も同様に保護、発展をみた。そこにはやはり禅僧の優れた人材の活躍を見逃すわけにはいかない。この時期にとくにあらわれたのが、慶寿寺および海雲寺に住職した印簡を保護し盛り立てた官僚檀越の存在であった。

二　慶寿寺海雲寺印簡伝について

慶寿・海雲印簡伝についてもっとも詳しいのは、「仏祖歴代通載」[3]所伝のものがあり、これはのちの福州鼓山湧泉寺永覚元賢の撰になる「継燈録」巻三所収、武林南澗の嗣法の行昱和南の撰の「続燈存稾」巻五所収、明の浄柱の撰出にかゝる「五燈会元続略」巻四所収、同じく通容の撰による「五燈厳統」巻二十二所収等に所載する海雲印簡の伝記は、すべて「仏祖歴代通載」巻第二十一の念常の記載せるものの一部を抜粋したものであろう。念常は至正元年（元順帝、一三四一）に完成している。翰林学士虞集と昭慶寺覚岸宝州の序文もある。丁度海雲印簡の死後八十四年後の脱稿であるので、その資料は詳細にして確実なものが多いものと考えられる。その記述は、印簡が中観沼に教化をうけた十九歳の時までと、中観沼の没後さらに中和璋に師侍してからの活動の二期に大別される。

通載伝によると、「元代の慶寿海雲印簡は金代の泰和壬戌二年十二月（一二〇二　南宋寧宗嘉泰二年）に山西省嵐谷の寧遠の宋氏のもとで泰和二年（一二〇二）十二月十五日に生れた。父は虚静先生と云われ、郷里の人から慈善をもって信服されていた。幼より恢偉にして神悟の風あがあったという。七歳のとき『孝経』の開宗明義章を教わったとき、開いたのは何宗で、明かにしたのは何の義か、と尋ねたので、親は驚いてその非凡なるを知って、傳戒顔公なる人物に接せしめたという。顔公もまたその根気をみようとして、

「草菴歌を授けていうに、世の壊と不壊の元はもと〳〵一つの主があるといったが、それに対してそれは客ではないのか、

と反論して驚かせたという。さらに中観沼公に礼を得て、こゝで印簡の師となしたという。八歳のとき『三帰五八十善戒法』を受け、十一歳のとき恩賜納具(具足戒)を受け、洪彦上座と問答を行って『小僧なるも戒説の得たものは大』との意をのべ、上座より注目された。そして十二歳のとき、師の中観沼より『汝の欲するところは文字語言のみであるから、今後は止めて、いづれ身心は枯木で死灰の如きものであること、真実とは何かについて、悟るよう心がけなければいけない』と悟されて感じ[4]たところがあったという。十三歳のとき、チンギスハンが天下を征したが、このとき居住の地にあって落城に逢ったとき、衆人の中で皇帝に親しく面接したという。この際、師に髪のもとどりを戻すことをすゝめたが、印簡は『もし蒙古の国儀に従いて行えば、即ちそれは僧の相を失うことになる、と。そこで旨を蒙ること故のごとくであったので、これより僧と同じからず、俗民と異るものあるなり』と云ったという。」

丁度このころはチンギスハンの九年南宋寧宗、金の昇王貞祐元年すなわち一二一四年のときである。金は一時蒙古と和したが、南の汴京に逃げて遷都し、ために蒙古は再び旧都北京を攻めたが、このころチンギス汗が金の知識人耶律楚材やその師万松行秀を知りはじめたのである。両者とも蒙古の対中国政策に大きな影響を与えた人物と禅僧であったが、前者楚材は二十五歳前後、その師万松行秀は四十八歳の時であるから、十三歳の印簡がそのあとをついでフビライの禅の信仰と保護、禅宗の発展への活躍を与える基礎があらわれたころとみられよう。

その後、金と蒙古との戦いと和平は、一二三四年、南宋の理宗の端平元年までつゞいて金朝の滅亡を見るに至るが、その間に前述の如き、多くの人材、物資、領土が蒙古の支配下に次第に入っていったのである。蒙古は被支配民漢族に対しては寛大で、とくに金朝下の耶律楚材については自己の軍師と仰ぎ、その師僧万松行秀の禅についても大いに保護を加えていったのである。金朝から蒙古への禅宗の保護と発展はこのようにして受けつがれた。そして次の世代へ禅宗が更に引き継れていく経過として、印簡が十三歳の時、すでにチンギスハンと「親面聖顔」していたことも奇しき因縁とも申すべきものがあったのである。

さて「通載」所伝に戻って「十八歳のとき再び蒙古兵の南下がはじまり、嵐城において、戦争より逃れる四衆逃難がはじまったが、そのとき、中観に近侍したまゝ離れぬ印簡をみて、師は『春秋に富む汝は、こゝで玉石共々滅することなく、逃れよ』とすゝめたのに対して、印簡は『因果は差なし、死生は命（運命）あり、安んぞ師を離れて脱免を求めんや、縦に脱するを得ば、また仁子の心にあらざらんや』といったので中観はその誠に感じて、ともぐ〳〵北帰し、蒙古につくことを決したという。そのことがあって翌日、嵐城は陥落したが、この時の印簡の蒙古将軍中の史天澤と李七哥の両者との出逢いが、その後禅宗の関係を決定づけたともいえよう。すなわち、

清楽元帥史公天澤と義州元帥李公七哥なものあり。師の気宇の非常なるをみて、問いて曰く、なんじは何人なるか、と。師いわく、われは沙門なり。史曰く、食肉するや否や、師、曰く、何の肉なるや、史曰く人肉なり。師曰く、人は獣にあらざるなり。虎豹さえなお相食せず、況んや人においておや。史曰く、今日の兵刃のもと、なんじはまたよく傷つかざるや。師曰く、必ずその外護者を仗とするなり。公喜ぶこと甚だし。

李帥（李七哥）問いて曰く、なんじすでに僧となる。それは禅なるや教なるや。師曰く、禅と教はすなわち僧の羽翼なり。国の用人の如きは、必ず須らく文武兼済すべし。李曰く、然れば則ち必ずまた何に従りて住す。師曰く、二つともに住さず、李曰く、なんじ何人なるや。師曰く、佛師なり。また曰く、吾れ親しく中観に教わる。またこゝにあるなり。二公師の年幼にして畏懼するところなき応対の凡ならざるをみて、すなわち、住きて中観を見る。二公は中観の教の諄諄と誨すを聞き、すなわち大喜して曰く、果してこの父ありて、この子あるること然り、と。こゝに於て中観に礼し、師となし、師と共に結びて金石の友となる。国王中観をまねきて、師の分撥直隷するに及ぶ。成吉思皇帝は中観を黄犢軽車に載せて、師と親しく執御す(5)

こゝでは十八歳になった印簡の態度をみて感歎した蒙古の将帥史天澤と李七哥が、彼の師の中観沼公と見え、金石の交りをなすにいたる。とくにチンギスハンにも見えるに至ってその信を得るに至るのである。

中観沼は「継燈録」巻六「五灯全書」巻十九にも「未詳法嗣」の項に挿入してあり、禅宗の師承宗派関係は明確でない。しかし前述の印簡への教化は流行宗派[6]の感が強い。中観沼と印簡は「老長老小長老」（仏祖歴代通載巻第二十一）と呼ばれ、国王（摩花理国王）より中観慈雲正覚大禅師の署名と寂照英悟大師の名を受け、需用のものはすべて官給されたという。印簡の十九歳のとき中観沼は七十三歳にして示寂したが、その時羽客楊至慎が来りて頌を求めたので、印簡が代書したという。すなわち

偈に曰く、六十三年、掣電の如く、行に臨み君の為に一線を通ず、泥牛の飛過して海東より来る。天上の人間尋ねて見えず。

（偈曰、七十三年如掣電、臨行為君通一線、泥牛飛過海東来、天上人間尋不見）

とみえ、中観沼はこの詩頌を与えた五月二十七日の三日後六月一日に示寂したという。この中に「海東より来る」とあるところよりみると中観沼は、高麗よりの来朝した禅僧であったと推定されるのである。すでに中国において朝鮮よりの中国禅へ参加する僧は新羅から高麗へ至って多くあらわれたにもかゝわらず、中国内で一派の主流となっていった禅僧は少い。

三　史天澤と海雲印簡

チンギスハンの猛将ムハリ（木華黎）が金の中京を攻めて陥したとき、耶律楚材も降って再び蒙古に見出[7]されたが（一二一三年）このとき河北の豪族軍閥の史秉直[8]とその子史天倪[9]、史天安[10]、史天澤[11]と共に降した。そのころムハリ[12]はジャライル部に属し、一一九六年、父子共にチンギスハンに参じて、ケレイト部攻略に大功をたて、一二〇六年全蒙古を統一すると、ボオルチュ（博爾求）、チラウン（赤老温）、ボロフル（博爾忽）とともに四大功臣の一人として、左手の万戸（ジュンガールトーメン）すなわち東方興安嶺方面指揮者となり、以後中国および東北部を支配し、一二一七年には大師国王に封ぜられ、蒙古の都行省承制行事としてこの地方の最高責任者となって活躍した人物である。そのムハリのために父子ともに力を尽した漢人将軍として活

躍していたのが史秉直親子であった。つまり一二一三年ムハリ下に入って、たゞちに金軍の将武仙を降し、蒙古軍下に入れたが、再び反抗した武仙に史天倪が殺されるやたゞちに弟天澤が継承してこれを打撃して勝ち、この地方真定を鎮めるに至り、さらに河間、大名、東平、済南の五地方の万戸の統率者になった。「元史」巻一五四同伝によると、天澤は字を潤甫といゝ、身長八尺その声は洪鐘の鳴る如くで、騎射を善くし、勇力は人に絶するものがあった。フビライが即位し世祖となると漢人最初の宰相として中書右丞相の地位についた。世祖に従って内乱アリクブガ（世祖の弟、阿里不哥）の乱や李壇の反乱などに功があり、世祖より絶大な信頼のあった人物である。とくに彼の性格は勇武であるが、一方では善政に力を尽したことは、「民が賊に従ったもの万余人いて、これを殺そうとした者に、かれらはみな兵となった民（漢人）で、賊の脅しの為によったのみであるので、これらは釈せと、命じたり」「政治をとるにあたって、治国安民の術を行わざることなかった」といったことなど蒙古の統治に大きな力があったものというべき人物であった。史天澤は至元十二年（一二七五）南宋の滅亡する五年前（恭宗徳祐元年）に七十四歳にて、南宋討伐軍総司令官として襄陽より郢州（湖北省）に進軍中、病に倒れて二月七日没している。逆算するとその生年月日は南宋の神宗の嘉泰二年（一二〇二）にあたる。奇しくもこの年は印簡の生年と同じ年である。前述の（項目㈡）史料の中に、史天澤と印簡がはじめて逢って会見したときの会話に「天澤は師（印簡）の気宇の非常なるを見て感じたが、印簡が外護者（天澤のこと）ができて仗となってくれるので安全であることをのべたので、天澤が非常に喜んだ」といった話も、実は天澤が、若年にして同年輩（十八歳）の態度に感じ、お互に相通ずる点があったものと思われ、それ以後印簡は史天澤によって外護されるに至る契機をつかんだということになる。天澤の人民を憐む心は、あるいはのちに印簡とその師中観沼の教えを受けた影響も大なるものがあったかも知れない。「元史」巻一五四にも

天澤は平居して、未だかつて自らを矜（おし）まず、そのよく大節に臨むにおよび、大事を論じて毅然たり。天下の重きをもって自ら任ず。年四十八にして始めて節を折りて読書す。然も資治通鑑に熟す。論を立てゝ多く人の意表に出ず。

と賞して彼の政治に対する態度、努力を注目している。また共に居した義州元帥李七哥もあるいは同伝所載の保定出身の李

進のことではないかと推定され、共に史天澤と分けあって諸道を征している者で、若年の漢人将軍であったと思われる。印簡に感心した二人がその師中観沼に逢い、「諄諄」と教えを受け、父子の固い結りをなすに至ったという。中観に慈雲正覚大禅師と署名したのもそのような慈心に感じたからであろう。中観が道士と交りをもっていたことは中観の死期に当り羽客楊至慎が来たことからも判る。師の没したあと舎利供養を行った際、

唯、乞食して塔を看る。一夜空中に声あり、師の名を召するを聞く。師は瞥然として省あり。すなわち遷りて三峯道院に入る。また人に告ぐるあるを聞き、曰く、大事まさになれり。行きてこゝに滞ることなかれ。黎明策杖して燕にゆく。松鋪を過ぎて雨にあう。岩下に宿す。撃火するに因って大いに悟る。自ら面をたゝいていう、今日はじめて眉横、鼻直なるを知る。信じていう、天下の老和上、寐悟せず、と。

燕に行くことは中観の臨終の時のすゝめであったが、師の死に際して感ずるところのあった印簡が途中で大悟したことは頷ける。中観が道士的な仙術を信じていたか、「一夜聞空中有聲召師名」とは道者的世界との交流の感がする。

四　印簡と師中和璋禅師

（法嗣）

- 昭覚克勤
  - 霊隠恵遠
  - 虎丘紹隆
  - 大慧宗杲
- 天平恵勤
- 龍門清袁

楊岐方会（楊岐派）—白雲守端—五祖法演—天目斉—懶牛和—竹林宝—竹林安—容庵海—中和璋—**海雲印簡**

印簡は中観沼の死後、燕京の大慶寿寺[13]を訪ねたのはやはり中観沼の意向であったと思われる。大慶寿寺では中和璋に謁して

教を受けたが、彼は臨済宗楊岐派五祖法演の流れを汲むものであった。同じ系統の大慧宗杲は、南宋の積極的国粋派として禅の行動的活動を主張して、それを僧侶のみならず官僚士庶にまで押しすゝめた禅僧であり、師の昭覚克勤や法兄虎丘紹隆とともに、禅の中国社会における活動流布にとり組んだ人物である。史伝では昭覚克勤派下の詳細なものに対して、中和璋系の五祖法演に至るまでの記録は少い。中和璋の師は「継燈録」巻第二臨済宗項にみえる容菴海禅師であり、その伝嗣の添書きとして

師は竹林安を嗣ぐ、安は林寶を嗣ぐ、寶は懶牛和を嗣ぐ、和は大目齊を嗣ぐ、齊は五祖演を嗣ぐ、齊より以下は會元に俱に出ずるなし。

とあって、各伝とも記録はなく、燕京慶寿中和璋に至って、記載があり、それらは前述の如く「仏祖歴代通載」巻第二十一の印簡の所伝の一部にある中和璋の記事を削って所載してある。従って天目斉以後何時頃か判らぬが、華北に寺居を構えていたものであろうと推定され、政治社会的にはやがて曹洞宗の万松行秀の如き金朝下に活躍するものなどもあって、臨済宗楊岐派の活動する余地はなかったものと考えられる。それが印簡の時になり、初期元朝下漢人官僚としての史天澤、李七哥との知遇によって総率ムハリに知られ政治社会の上に禅宗の活躍する宗派の交替の機会を得るようになるのである。

中和璋の来歴は明確ではないが、中観沼と何らの形で識っていたのは大慶寿寺にて中和璋が印簡の来寺を予知していたと思われる節があることである。其所で多くの問答が行われている。

こゝに於て徑に中和老人璋公に謁す。中和は先だつ一夕に夢に一異僧が徑に策杖して、方丈に趨き師子座に踞するを夢みた。晩に及んで師は引見するに至る。中和笑って曰く、此の衲子はすなわち夜来より夢みしところの者なり。師（印簡）すなわち問うて曰く、某甲は来らずして来る。作磨生（どのようなもの）か相見せん。

壽（慶雲寺勘辨海雲）曰く、参ずるはすべからく実参たるべし、悟はすべからく実悟なるべし。野榧（枯木の根）を打すること莫れ。師（印簡）曰く、某甲は撃火迸散するによって、すなわち眉横鼻直なるを知る。寿曰く、吾れ此の処別な

り。師曰く、如何か信を表するか。寿曰く、牙は是れ一尸骨なり、耳はこれ両辺の皮なり。師曰く、まさに別に（意）あらんと謂うべし。寿曰く、錯（あわてる）。師喝して曰く、草賊大敗す。[14]

寿一日師に云いて曰く、汝は今すでに大安楽の地に到る。よろしくよく護持すべし。吾れ正法眼蔵、祖師涅槃妙心あり。汝に密付す。湮没しむることなかれ。師、耳を掩いて出ず。すなわち衣領をもって師に授け頌して曰く、天地同根にして異殊なし。象山何れのところにか渠に逢わざらん。吾れ今、空王印を付与す。万法光輝して総て一如なり、

と。すべて悟りを開いて来寺した印簡に慶寿寺の勘辨（師家学人が互に相手を勘検辯別すること）によりて寿の後住に定められたものと思われ、前述の史料中「壽曰、参ずるは須く實参なり」とは、入寺し中和との対話ののちの日の話であるがも知れない。その後興州（山西省）の仁智寺に出世し、さらに淶陽の興国寺、興安（陝西省）の永慶寺等の華北の寺を遷って、最後に燕京の大慶寺に安住したという。これらはすべて「太師国王及び諸重臣の命」（仏祖歴代通載巻第二十一）によって住したもので、彼の能力が優れたため、多くの執政高官に信仰されていたことを伺い知ることができる。

師中観沼七十三歳で死した時（一二二〇）印簡十九歳であった。燕京大慶寿寺に参じた時は、蒙古太祖丁五年（金朝昇王興定四年、南宋寧宗、嘉定十三年）で、丁度金朝下で曹洞宗万松行秀（一一六六―一二四六）の五十四歳にして、居士宰相耶律楚材[15]（一一九〇―一二四四）と共にムハリ（木華黎）の蒙古軍下に降して、その能力を買われたころである。因みに耶律楚材がその労力を尽して蒙古のために暦をつくってすゝめたのもその十一月であった。その漢人に対する民治・財政等の力は初期の蒙古太祖の政治に大いに寄与したものであった。したがって禅宗が最初に蒙古へ与えた影響は万松行秀が蒙古の太祖（位一二〇六―一二二八）につゞく太宗（位一二二九―一二四五）のころ没（一二四六）するまでの間であった。

すなわち印簡が大慶寿寺に移り中和璋に面接した十九歳ころからやがて万松行秀の八十一歳で没したころは、四十五歳までの間の壮年期にあたる。彼の活躍はそれ以後表面にあらわれることになるのである。

五　印簡と劉秉忠

前述の如く曹洞宗万松行秀の蒙古朝初期における保護と活躍があったが、行秀の没後もその嗣承の弟子たちによって布教、信仰が行われている。印簡の抬頭、活躍もこの時期に重なっている。「釋氏稽古略續集」巻第一に

丁卯至元四年（一二六七）、佛國禅師、師諱は至温、字は其玉、號を全一という。佛國普安と謚さる。刑州（山西省）郝氏の子なり。辨菴訥公に禮し、剃せらる。佐くるに富公を萬壽（寺）に還すなし。萬松に参じ、侍者となる。すでにして太保劉公が世祖に知遇さる。師に薦めて召して語る。大いに悦びてまさに官をもって授けんとす。受けずして曰く、天下に佛法の流通す。臣僧の願は、富貴は望むところにあらざるなり。

とあり、太保劉公の知遇によって、万松行秀と共に外護し、さらに高官に付かせようとして固辞したという。劉公とは劉秉忠のことで、後述するように海雲印簡と嗣承関係あるものと思われる。そこで劉秉忠と印簡についてのべる必要がある。

劉秉忠（一二一六―七四）は「元史」巻一五七、及び「新元史」巻一五七に掲載され、その来歴詳しいが、同時に「仏祖歴代通載」巻第二十一にも同じく、仏教関係の来歴を記してある。それによると「秉忠は蒙古の至元十一年（一二七四）八月に光禄大夫太保秉忠、太傅儀同三司文貞を贈られ」五十九歳で薨じている。かれは字を仲晦といゝ、瑞州（江西省）劉李村より祖先は出たが、遼につかえ金のはじめ祖父は邢州（河北省邢台県）の節度副使となり、以後土着した。父の潤は邢州録事鉅鹿県提領、内丘提領と歴任した。秉忠は風骨秀異で志気英爽であったが、家は貧であったという。十七歳のとき刑台節度使府令史に任ぜられ、親の面倒をみていた。その勤務ぶりは幹敏精潔で、諸老吏が能力に感服したという。しかしある日読書をしていて筆を投じてしまった。それは「我が家は歴代衣冠をうけて筆吏となったが、世の中に志を得ることは出来ない。そのため出世間のことを求めたいといって役を去り、武安山中にて岩石の間で草衣木食の生活に入った。天寧寺の虚照禅師がこれを聞いて

彼を招致し、披剃して僧となし、さらに「汝は経書を知り、翰墨をよくなしている」といって掌書記を命じた。そののち雲中（山西省大同市）南堂寺に住することになった。たまたま海雲印簡が召されて都へ上るとき雲中を過ぎたとき、秉忠（釈名子聰）の博学にして芸能の多きことを聞いて、相見して共に上京した。この時の様子を「宋史」巻一五七同伝によってみると、

（印簡と）倶にゆく、すでに入見し応対す。称旨しば〳〵顧問を承す。秉忠は書において読まざるところなし。もっとも易きに及ぶ。邵氏経世の書、天文地理律暦、三式六壬遁甲の属に至るまで、天下のことに通論に精からざるはなく、諸掌を指すがごとし。世祖大いにこれを愛し、海雲（印簡）南還にあたり秉忠をついに藩邸に留む。

とあり、フビライに任える身となった。以後漢地統治の重点を説き、政策施行を献言し、政治顧問として重きをなし、やがてフビライが即位し至元に改元（一二六四）したとき聰書記と時人に称せられる政治枢密に参与するまでになった。還俗して前の光禄大夫・太保を授けられたという。秉忠の功績は多く、

はじめ帝秉忠に命じて桓州東灤水の北に地を相め、城郭、龍岡を建て、三年にして畢る。名を開平継升といゝ上都となして燕の中都となす。四年また秉忠に命じて中都城を築き、はじめて宗廟宮室を建てる。八年建国を奏し国を大元と号して中都をもって大都となす。他の章服を頒つが如し、朝儀を挙げ、俸禄を給す。官制を定む。みな秉忠よりこれを発す。(15)

などとあり。元朝確立に絶大な力を残したものと思われる。例えば「元」号などは「辛未至元八年（一二七一）宋咸淳七年、十一月始めて大元国号を建つ。易の乾元の義をとる。はじめて蒙古学校を興す。太保劉秉忠の請によるなり」（釋氏稽古略続集巻第一）とみえて、易や陰陽学に通じていた秉忠の考えから出たものが大であったのである。

ところで印簡が仏教を総括するようになったのは、憲宗の元年辛亥歳（一二五一）丁度南宋理宗淳祐十一年の時である。「元史」巻第三、憲宗の項に

僧海雲（印簡）を釋教事を掌らしめ、道士李真常をもって道教事を掌らしめた

とあって印簡の五十歳の時である。万松行秀没後五年であり、万松の法嗣佛国禅師善安をもって、劉秉忠が憲宗の子のフビ

ライにすゝめたが断られたころである。「釋氏稽古略続集」巻第一にはつゞいて

憲宗は海雲主釋教に命じて、天下に詔し資戎会をつくる。師は旨を持して中外に宣布す。而して輔けてこれをなす。劉公は衛承制錫して師を号す。諸路僧尼のことを総摂す。師は鋭意教を衛り、僧衆これに頼る。のち印を納れて辞職す。云々

とあって、印簡の就官はこの僧官に任ぜられた五十歳以後一二五七年五十六歳で死亡するまでわずか六年間の表面に出た活躍であった。この時劉秉忠は十五歳下の三十五歳の時であったわけである。たゞ大檀越外護者であった史天澤は同年配で至元十年（一二七五）七十四歳まで居り、かつ劉秉忠も至元十年（一二七四）五十八歳まで生存したことを考えると印簡の死後も約二十年間は至元四年まで（一二六七年）生存した仏国普安と共に仏教政策を同様におしすゝめたものと思われる。とくに世祖の治世に至るや、中統元年（一二六〇）には普く僧尼を度し梵僧八合思八（パゴシバ）を帝師となし、釋教事を統し、桓州東染河北にある龍岡に開平府を建てや東北、西北に大乾元寺や龍光華厳寺をつくり、三年（一二六二）に旻天寺において大仏事を七昼夜にわたり行った。すでに憲宗の六年（一二五六）、印簡の没する前年、旻天寺において、建会が数日行われ、奇瑞があらわれている（仏祖歴代通載巻第二十一）さらに、至元元年（一二六四）には燕京に都し多くの会を設け、僧を度し、ラマ僧扮彌遶発思八を国師に詔し、秘密会を設け[20]しめている。

つゞいて劉秉忠に座右の顧問として常置せしめた様子を次のごとくのべている。

（中統三年）八月、僧子聰に命じて同じく枢密院事に議す。子聰に詔して、その姓劉氏を復して、その名秉忠に易え、大保参預中書省事を拝せしむ。長生の天の気力に皇帝の聖旨を制す。おもうに劉忠の忠気剛直をもってし、学は文に富む。空門の迹に晦しといえども、つねに心に聖道を潜む。朔の藩邸に居し、卿は実に賓僚なり。側ち高誼を聞くこと二十年におよぶ。避方は幾万里に出游し、予の嗣服におよぶ。すべからく、汝の安を計るべし。先の正名は、何ぞもって衆を厭わず。よろしく師位に従い、兼ねて政機を総すべし。とくに光禄大夫太保参預中書省事を授くべし。卿はそれ勉めて朕が躬

を輔くべし。率先してすなわち属するもの朝夕の勤惰を察し、議論の是非を審にすべし、凡そ施為あり、並べて裁決をきく、たゞに成績をみ、別に寵章を示す、これに准ずべし。（仏祖統紀　巻第四十八世宗）

とあって、劉秉忠を還俗せしめて政治上の宗教政策の諮問を常にさせ、その意見を徴して事を実行に移していたものと思われる。従って至元二年（一二六五）には、僧人を総統するに五大部経を通して徳業あるものを中選し、州都の僧録判正副都綱などの官に任じ、各路の地方に「三学講・三禅会）を設けて、教講と禅業に邁進せしめたのである。さらに翌三年（一二六六）には僧侶道士に中都の寺院・道観において国家祀福せめ、僧機に総統職をつくって任命して、慶寿寺に居住せ[21]しめた。慶寿寺はいうまでもなく印簡の一時居した官寺である。これらの僧道の官職、任命、行事などのことは、当然、劉秉忠の発案になったことは勿論である。印簡の没後のその禅思想と社会的あるいは政治的発展、政策は秉忠によって実行されていったのである。上述の史料は「仏祖歴代通載」巻第二十一所載にもとりいれられているので、至元元年（一二六四）以後の世祖即位後の秉忠のもっとも重要な点になるのであるので、再録の形で掲載してみた。

六　印簡の禅思想と官人教化　其の一

万松行秀と海雲印簡とは南宋末の華北で金朝および蒙古と元朝初においてはからずも展開の時代を重ねてその禅思想を王朝政権下に保護を得て発展せしめた。行秀は金朝蒙古太祖に仕えた耶律楚材を嗣承居士とし、その外護の下、禅を布教し、印簡は蒙古将軍の宰相ムクリ（木華黎）とその将、漢人史天沢と李七哥の外護をうけ、共に蒙古の宗教政策のみならず政治一般にも大きな影響を与えたと思われる。行秀は印簡より三十六歳年長者であり、経歴からみれば、印簡はその大きな宗教的な影響力をうけ嗣いだものといえよう。「仏祖歴代通載」巻第二十一に次の如き史料が掲載してある。すなわち

乙未（一二三五）、朝廷は札忽篤侍読を差す。経を試して僧道を選す。万松長老（行秀のこと）、嘆じて曰く、国朝革命

の来りしより、沙門久しく講席を廃す。看読するもの殊に少し、と。すなわち同じく禅教の諸老宿、師（海雲印簡）に請いてその事を董す。師は従容として対えて曰く、諸師まさにここをもって激厲し、衆僧は応試して経典を習うべし。主上は必ず深意あり。われ今日の沙門をみて、戒律を護ること少く、学んで礼を尽さず。身は道に遠し。故に天龍・衛を亡びて朝廷その考試を励するを感ずるなり。三宝、被（被護）を加うるは必ずしも聖詔に辜かず。遂に華使と相見ののち、その処置法度は悉く師の議に従る。厦里丞相、忽都護大官人をもっていう。師に問いて曰く、今、聖旨を奉じ、官の試経を差す。識学者は僧となすべし。字を識らざるは、悉く帰俗せしむ。師曰く、山僧はかって看経せず、一字も識らず。丞相曰く、すでに字を識らずして、如何にして長老と做さん。師曰く、方今の大官人は還って字を識ることまたなし。時に外鎮の諸侯みな在り。師の言を聞いてみな大いに驚かす。丞相また曰く、必竟如何なることか。師曰く、もし人のこの事を知り、仏法を通明するにいたるごときは、まさに世法は即ち仏法なるを知るべし。道情は豈に人情に異ならんや。古の人はまた負販を起すあり。大功名を世に立て、史冊に載す。千載の下、凛然生気なり。況んや今聖明天子、上にあり。日月の照臨の如く、僧道を考試すること、経童の挙の如し。豈に賢良方正、同科国家をもってすべきや。よろしく万善を興修し、三宝を敬奉すべし。もって上天を奉り、永く国の祚（幸い）延すべきなり。われら沙門の舎を用いるは、何ぞ道うに足らん。丞相、この言をもって大官人に告げる。すなわち従りて奏聞す。これによって考試と雖もまた退落するものなし。聖旨を蒙るは、ことごとく太祖皇帝により、濟く存す。僧を聴すこともとの如し。

乙未朝廷差札勿篤侍読、選試経僧道、萬松長老嘆曰、自国朝革命之来、沙門久廃講席、看読殊少、乃同禅教諸老宿、請師董其事、師従容対曰、諸師当以斯激厲衆僧習応試経典、主上必有深意、我観今日沙門、少護戒律、學不盡禮、身遠於道、故天龍亡衛而感朝廷、励其考試也、三宝加被必不辜聖詔、遂與華使相見之後、其處置法度、悉従師議厦里丞相以忽都護大官人言、問師曰、今奉聖旨、差官試経、議字者可為僧、不識字者、悉今帰俗、師曰山僧

不曽看経、一字不識、丞相曰、既不識字、如何做長老、師曰方今大官人還識字也無、于時外鎮諸侯皆在、聞師之言、皆大驚異、丞相復曰、必竟如何、師曰、若人了知此事通明仏法、応智世法即是仏法、道情豈異人情、古之人亦有起于負販者、立大功名于世、載于史冊、千載之下凛然生気、況今聖明天子在上、如日月之照臨、考試僧道、如経童之挙、豈可以賢良方正、同科国家、宜以興修万善、敬奉三宝、以奉上天永延国祚可也、我等沙門之用舎、何是道哉、丞相以是言、告于大官人、乃徒而奏聞、由是雖考試、亦無退落者、蒙聖旨、悉依太祖皇帝存済、聴僧如故、

この史料は読み方次第では、万松行秀のみの記事に見えるところがあるが、この記事の前に、「辛卯（一二三一年）十一月に印簡の諸寺を巡り、ついに大慶寺に至ったとき、五僧と問答を交したこと」を書いてあり、またこの記事のあとに、「丙申（一二三六）、丁酉（一二三七）の記事があり。太祖皇帝二皇后、光天鎮国大士号をもって師に奉じ、己亥（一二三九）冬、師は再び起されてまた大慶寿寺の主となった」とあって、万松行秀が沙門の経典文字を看読能書するものが少くなったことを嘆いたとき、印簡が諸僧の質問にある僧道の試経を強調することも、天子の深慮なると答えた、と考えても可であろう。しかし文字は禅門とくに臨済禅では「不立文字」を主張し、文字の真意あるところのものは文字の外の意味すなわち無字による悟りである。しかるに文字考試は、俗人の童挙であって、僧道は文字識字を超えるものであるという処からついに「僧侶の試経は行われたが、還俗されて落第したものはなかった」ということになったのである。この記事の太宗七年乙未の歳は（一二三五）万松行秀六十九歳の時、海雲印簡の三十四歳のときであった。耶律楚材は四十五歳、印簡の外護者史天澤は同年の三十四歳の時である。「僧道試経」の問題は、当時不識字僧の多いのを嘆いた万松行秀の発案になったものであろう。太祖（蒙古）の「不識字僧、悉還俗」との考え方は、ままに実務者官僚としての面の僧侶・道士の任用の仕方であって、当時山川草木に居して禅の修行専一に志したものにとっては、寝耳に水の出来ごとであったと思われる。そのことに対しての「僧道考試して、退落者なき」ことを実現したのであれば、その仏教、道教の世界におけ蒙古の政策に与えた影響は、万松行秀、海雲印簡とも

に絶大なものがあったといわざるを得ない。

七　印簡の禅思想と官人教化　其の二

印簡に推薦された劉秉忠は、もともと「易の経世書、天文地理、律暦、その他多くの術に通じていた」（元史巻一五七）人物であったが、とくに「陰陽術数之精の占事は、知ることあたかも符契に合する如き」（仏祖歴代通載巻第二十一）ものであった。太宗十一年（一二三九）己亥歳冬大慶寿寺に再起した印簡は、そののち「太宗十四年壬寅の年（一二四二）護必烈大王の請によりその幕下に赴き、仏法の大意・人天因果の教えを説き、種々の法要行事を行って、王の信仰を得て菩提心戒[16]を授けたりした。この時印簡四十二歳である。印簡と秉忠との出逢いの時期は明らかでないが、秉忠の十七歳以後天寧寺に入り、のち印簡が山西省雲中にて上京中に逢ったことになる。秉忠十七歳の時は印簡三十三歳の時であり、少くとも一二三四年ごろ以後のことである。壬寅護必烈大法要云々の記事についで、劉秉忠との印簡の問答があるので、この記事は少くとも太宗十四年（一二四二年）以後のことと思われる。同伝中統五年八月（一二六四）の記事に

なんじ劉秉忠の気を吝るに、剛にして直をもってす。学びて文に富む。空門の迹に晦しといえども、毎に聖道に潜心す[17]

とみえて、「元史」の巻一五七所載にあるごとく、諸学術数に知識は及んでいたが、出家して子総と名づけられた。そのため仏教のことに関しては未だ晦かった、ということをのべている。そこで師印簡との問答について次の如くのべている。

時に秉忠書記が侍となる、郎劉太保なり。復に問う、仏法中にいずくんぞ天下の法あるや否や。師曰く、法界子を包含し、四生を育つ、その事大は仏法の境中に備う。此の四大洲は大地中一微塵ばかりの如し。況んや一四海においておや、もし社稷の安危を論ずるがごときは、生民の休戚にあり。休戚の安危はみな政にあり。また天にあり。天にありて人にあり。みな心を離れずして、人が天の人とともにあるを知らず。ここにその別を問う、法は何において行う。もとその天を

分つや人なり。わが釈迦氏の法は、廟堂の論に於ては、王法正論品とあり。理もとより昭然たり。難とするにあらず、易きに非ず。唯、王の尽く行ずる能わざるを恐るるなり。またよると、天下の大賢碩儒を求むべし。もって古今の治乱興亡のことを問う。まさに聞するところあるべきなり。王また問う。三教は何の教を尊となす。何法が最も勝るや、何人を上となす。師曰く、諸聖のうちわが仏が最勝。諸法のうち仏法が最も真なり。居る人の中で、ただ僧は詐ることなし。ゆえに三教中、仏教がその上にあるは古来よりの式である。ここによって太后は祖皇の聖旨に遵い、僧を上首に居して、仙人を僧の前にあるを得ず。王は珠襖金錦、無縫の大衣をもって、師礼をもって奉ず。王、固く師を留むれども師固辞し、まさに別れんとす。王問う、仏法ここを去り、如何に受持せん。師曰く、信心は生じ難く、善心は発し難し。いますでに生を発す。務めて護持を要す。専一に忘れずば、もとより菩提を受く。心戒を見ず、三宝を過るあり、つねに百姓を念じ、不安はよく撫す。賞罰を綏明（やすんじ明める）し、政を執るに利なく、賢を任せ、諫を納る。一切の時中、つねに方便を行う。みな仏法なり、(18)

時秉忠書記為侍、郎劉太保也、復問、仏法中有安天下之法否、師曰、包含法界子育四生、其事大備於仏法境中、此四大洲、如大地中一微塵許、況一四海乎、若論社稷安危、在生民之休戚、休戚安危、皆在乎政、亦在乎天、在天在人、皆不離一心、而人不知天之与人、是其問別、法於何行、故分其天也人也、我釈迦氏之法、於廟堂之論、在王法正論品、理固昭然、非難非易、唯恐王不能尽行也、又宜求天下大賢碩儒、問以古今治乱興亡之事、当有所聞也、王又問、三教何教為尊、何法最勝、諸法之中仏法最真、居人之中唯僧無詐、故三教中仏教居其上、古来之式也、由是太后遵祖皇聖旨、僧居上首、仙人不得在僧之前、王以珠襖金錦無縫大衣、奉以師礼、王固辞、将別、王問、仏法此去如何受持、師曰、信心難生、善心難発、今已発生、務要護持、専一不忘、元受菩提、心戒不見、三宝省過、恒念百姓、不安善撫、綏明賞罰、執政無私、任賢納諫、一切時中、常行方便、皆仏法也、

ここにいう王とは護必烈大王が印簡にその法を聞いて信仰を固めたことについて記してあるが、その時、劉秉忠書記が侍して共々聞いている。時に太宗の十四年壬寅歳（一二四二）印簡四十一才、劉秉忠二十七歳のときである。それは仏法がみな人を安ずるためにあり、正にそれは天の心を行う政治と同じである。仏法はために儒教、道教の三つの中で最高の説をなしている。故に自分が居なくともその仏法僧の三宝を信仰する心を持しておれば、常に政治を行うのに公正無私、人の意見をいれ、一切のことを正しく処することが出来る、というのである。すでにして「陰陽術教に精」（仏祖歴代通載巻第二十一）」しかった秉忠にとって、政治を仏教と世間（政治）のことに結びつけたあり方に感じたものがあったのであろう。

七　印簡の禅思想と官人教化　其の三

印簡の仏法思想が「人天因果之教」であったことは前述で説明したが、それより前に、まず人民を治める人の道理を説き、その上で心服させることが必要で、仏教はその道理――ここでは儒教を指している――のすべてを含む整理であり、宗教であると諭している。すなわち太宗八年（一二三六）のとき

丙申、司ありて人臀を印識せんと欲す。師つとめて忽都護大官人に白（もう）していわく、人は馬に非ざるなり。すでにみな国朝に服す。天下の大、四海の広は、縦にまた逃散す。また何れにか帰さん。あに畜獣と同じくして印識すべけんや。ここによって印臀之法はついに止む。はじめ孔聖ののち、衍聖公を襲封す。もとの措くものは河を渡り、また曲阜廟林之祀を復す。時に公東平厳公を持す。書を師に謁し、師もって事を襲封していい大官人となす。師その言のためにいわく、孔子は善く古典を稽（まな）び、大中至正の道をもってす。三綱五常の礼、性命禍福の原は、君臣父子夫婦の道、治国斉家平天下、正心誠意の本は、孔子より、この襲封衍聖公に至る。凡そ五十一代、凡そ国にあるはこれをして襲承せしむ。祀事のことは未だ欠くるあらず。大官この言を聞いてすなわち大いに敬信す。ここにおいて師の言う所に従う。またその爵を襲し、も

って其の祀事を継ぐるを命ず。師また顔・孟相伝し孔子の道を復し、其の子孫を絶さざらしむ。周孔儒業を習う者に及んでは言となす。またみな其の差役の賦を免れるを獲る。これをして其の教を服勤して国家の用となさしむ。(19)

とのべており、蒙古の蛮人的気風より、中華の儒教思想による人倫の道を学び、実行することが大事であることを忽都護大官人に諭しているのである。この場合、印簡が直接蒙古語を解したのか、通訳者を仲に介したのか不明であるが、蒙古の大官人たちが、永く続いて中国漢人たちの風習人倫道徳に対して理解を示し、従来通りその「祀事」をすすめることを許している。「祀事」とは即ちその国の神に捧げ祭祀することを意味していよう。つまり征服下の人民を支配するにたゞ羊馬の如くしか扱え得ない術のみ知っている者が、更に別の中国の被支配者の立場からみる扱い方に感服せしめたことになる。印簡が蒙古人に諭した道は、まず儒教の道を知らしめることであったのである。力による支配のみ知る草原の民族が、上から下へのあらゆる社会に及ぶ倫理の関係に感じたことは容易に想像出来ることである。

ところで如上の印簡の言動教化、諸行動の中で、とくに禅思想として強力な接化、あるいは思想が宋代の禅僧の如き、独特な個性に溢れたものというよりも、中観よりうけついだ柔和な伝燈の禅思想の気風ともいえよう。それは第一に世々仏教を信奉していた母金源王氏の流れを酌取ってはいたであろうが、それよりも父虚静先生の強い環境影響が印簡を左右したと思われる。「七歳親授以孝経開宗明義章」(仏祖歴代通載巻第二十一)とあり、それを解するに「童幼神悟」(同上)なりと人々に称されたことを考えると儒学の家庭の影響が強く彼の基底にあったと思われる。十一歳のとき受具にあたり、洪彦上座より「どんな小僧となるか」といわれ「縁は小僧に与えられたが、戒説は大である」と答えた。洪彦はさらに「上座戒老か小なるか、我れはすでに老いたり」といったのに「休生分別なり」と大声一番、答えたという。「分別を生ずるをやむ」あるいは「休めば分別を生ず」か、十一歳の印簡が、洪彦上座に対していった言葉が、「分別思慮、区別をすることをなくす」、ということであれば、その会得するところかなり高いものであったということになろう。十二歳の時師の中観沼から得た「汝の文字語言によるを去れ」という教えに対して、もっぱら「自ら身心は枯木死灰の如くになれ」といって実行したという。中観沼はこれを

「野狐精」の禅であるとのべている。このような点から中観沼の法系はあるいは曹洞禅にも近いものがあり、彼の師侍した中和璋の楊岐派の禅と法系の結びつきがあるとすれば、楊岐派もこのころ曹洞禅の影響をかなりうけたか、あるいは楊岐・曹洞の接化の近似をうかがわせるものがあらわれたのであろう。すでに華北金朝下において、万松行秀の曹洞禅が風靡していたことと考え併せると、当地方の禅風の傾向を察すをことができよう。

八　印簡の禅観の特長

すでに印簡が幼より儒学を学び「孝経」に関心をもち、多くの学識者や仏僧と関係教化をうけたが、その思想は彼が師の中観沼が死亡してから、燕京の慶寿寺の中和璋に参じたとき、両者の問答にその内容をみることができる。慶寿寺に参内したのは印簡の十九才の時以後興州仁智寺へ住むまで[22]と思われるので、その何時の頃か判らぬが、早々の時期の問答と思われる。すなわち

寿（中和璋）曰く、参はすべからく実参たるべし、悟はすべからく実悟たるべし、野榧[23]を打することなかれ。師（印簡）曰く、某甲は撃火迸散するによって、すなわち眉は横鼻は直なるを知る。寿曰く、吾れと此処は別る。師曰く、如何か信を表すること。寿曰く、牙はこれ一口の骨、耳はこれ両辺の皮。師曰く、将に別ありといわんとすか、寿曰く、錯う。師喝して曰く、草賊大敗す。寿、休みて日去く。寿、臨済両堂の首座を挙して、ひとしく喝を下す。僧の済に問う、還って賓主ありやなきや、済曰く、賓主は歴然たり。汝、作麼生に会す、師曰く、秦時の鏡を打破す。尖上古錐を磨す、龍は漢外に飛霄す、何ぞ労して更に下槌せん。寿曰く、汝只にその機を得て、その用を得ざらん。師便ち禅床を掀ぐ（もちあげる）。寿曰く、路途の楽、ついに未だ家に到らず。師一掌とともに曰く、精霊千載、野狐魅、看破すること今銭に直さざるが如し。寿、一払子を打して曰く、汝ただその用を得て、其の体を得ず。師前に進みて曰く、青山は、寒色に聳え、月は一渓の雲を照らす。寿曰く、汝ただその体を得て、その智を得ず。師曰く、水は西東より流る、落花は向背なし。寿曰

く、汝は善語を三昧に言うといえども、没交渉たり。師拳を竪起し、また拍、一拍す、当時丈室震動す。寿曰く、如是、如是と。師、袖を払ってすなわち出ず。明日師に掌書記を命ず、これより中和またもって錐槌差別の関、楗渠偃の種種弁験を向上す。師もって無礙の弁才の応答みな契す。その精明の度を悟解すること前輩を越すなり。寿一日師にいって曰く、汝は今すでに大安楽の地に到る、よろしく善く護持のすべし、われは如来正法眼蔵祖師涅槃妙心あり、密に汝に付すべし、湮没せしむることなかれ。師は耳を掩いて出ず、すなわち衣を師に領授す。頌して曰く、天地同根にして異殊することなし、家山何処にか渠に逢わざらん、われ今、空王の印を付与す、万法の光り輝くこと総て一如なり。

寿曰、参須実参、悟須実悟、莫打野榧、師曰、某甲因撃火迸散、乃知眉横鼻直、寿曰、吾此処別、師曰、如何表信、寿曰、牙是一口骨、耳是両辺皮、師曰、将謂別有、寿曰、錯、師喝曰、草賊大敗、寿休日去、寿挙臨済両堂、首座斉下喝、僧問済、還有賓主也無、済曰、賓主歴然、汝作麽生会、師曰、打破秦時鏡、磨尖上古錐、龍飛霄漢外、何労更下槌、寿曰、汝只得其機、不得其用、師便掀禅床、寿曰、路途之楽、終未到家、師与一掌曰、精霊千載野狐魅、看破如今不直銭、寿打一払子曰、汝只得其用不得其体、師進前曰、青山聳寒色、月照一渓雲、寿曰、汝只得其体不得其智、師曰、流水自西東、落花無向背、寿曰、汝雖善語言三昧、要且没交渉、師竪起拳、復拍一拍、当時丈室震動、寿曰、如是如是、師払袖便出、明日命師掌書記、自此中和復以向上鉗槌差別関、楗（渠偃）種種弁験、師以無礙弁才応答皆契、其悟解精明度越前輩、寿一日謂師曰、汝今已到大安楽之地、宜善護持、吾有如来正法眼蔵祖師涅槃妙心、密付於汝、毋令湮没、師掩耳而出、即以衣頌（領）頌授師、頌曰、天地同根無異殊、家山何処不逢渠、吾今付与空王印、万法光輝総一如、（仏祖歴代通載巻第二十一）

中和璋との問答は、印簡の言動に対して、常に動態のみをみずに本体を極めよと臨済の接化の激しさを以て示し、ついに悟

るに至ったという。その「大安楽之地」に至った時、はじめて「如来正法眼蔵、祖師涅槃妙心」をもって与えたという。摩訶迦葉が釈迦より附与されたという正法眼蔵涅槃妙心から取って付与したものと思われるが、すでに法系上の大慧宗杲が、

尊宿前後の次序宗派の殊異の別なし、只向上の巴鼻を徹証して人のため黏を解き、縛を去り、正眼を具することを取るのみ[24]

とのべて、法系より次第に伝えるのみならず、本源の釈迦の真意を直ちに得るところに至ることを目標とすることをのべている。すでに大慧が師の圜悟克勤の碧巌録をも酷評を加えて、釈迦の正法を明らかに照すことを蔵するを目的としたことにあるように、師を超えて、より一そう正法に近づけることこそ悟への道であることを述べて、中和璋が正法眼蔵を印簡に密付したものである。中和璋が、大慧の正法眼蔵を意図していたことは、想定出来るが確たる史料はない。しかしその意味、方法が同様な方法をいっているのであるので、釈迦から迦葉への会得したものへの復帰であることを意味していることは当然である。「天地は同根であって、殊に異ってはいない、すべての法は、すべて一如である」ことを知ることは禅の究極の空観の体得であるとするのである。

三十歳以後、つまり禅の要諦を知ってより以後に関する接化としては次の如き問答がある。すなわち、慶寿寺に於て

一日、廊下にて数僧に逢う。師第一僧に問いて曰く、那裏（いづれ）へ去く、僧云う、花を賞しゆく、師また打す。第三僧に問う、那裏へ去く、云う那裏へ去かん、師また打す。第四僧に問う、那裏へ去く。僧は語なし、師また打す、第五僧に問う、那裏へ去く、僧云う、和上を覓め去く、師云う、他に覓めて作麼、僧云う、待ちて与に一頓を打す、師云う、将に什麼へ来りて打さんとす。僧云う、将に棒を来りて打さんとせず、師連打四下して云う、這の虚漢を掠す、衆みな走る。師召して云う、諸上座と、衆首を回らす。師云う、是れ什麼ぞ、と。（仏祖歴代通載巻第二十一）

ここでは印簡の接化の気迫が並々ならぬものになっていることに気づく。こののち万松行秀が、元朝以来沙門講席、看読の経学によること少きをなげいたが、印簡は僧の応試・学問もまた深い聖旨のことをのべ、禅教の僧は学問を試しても不落とし

て、無識の大官と同様に扱い、禅行あるものの不識は不問に付されていることも印簡の進言が功を奏したことにその政治的意味が大きいものといわねばならない。

ところで「禅宗雑毒海」[25]巻十　秉炬[26]

我相、人相、衆生相、寿者相なく、四相すでになく、生死永く絶す、十方虚空も消殞す、大洋海底に火発す　　寿上座　　楕堂

（無我相人相衆生相寿者相、四相既無、生死永絶、十方虚空消殞、大洋海底火発　　寿上座　　楕堂）

とあり、この寿上座はあるいは上述の中和璋のことではないだろうか。すでに「雑毒海」の、洪武十七年（一三八四）無慍序文の中に

昔、妙喜老祖（大慧宗杲のこと）洋嶼菴に居す、凡そ唱説するところあれば、侍僧の宏首座なるものが皆これを録して、これを名づけて雑毒海という。けだし老祖のいうところは参禅、得ざれば多くはこれ雑毒、心に入るの語をとるなり。この故に後の学者、およそ宿師の碩徳の偈頌、仏事等の語に遇いては、手ら録して帙をなす。また雑毒海をもってその来ること久しきなり。龍山の仲猷禅師は、一日その録するところを閲し、其の訛舛を厭って、ついにその繁を刪り、その精を掇う。類を分ち巻をなす。はじめてこれを板行す。その心はけだし作者の初心に負かざるを欲し、永く後学の懿範となさんとするなり。あるいは謂う、師の用心、もとより善し、それ妙喜の訓にもどるがごときはいかん。しかも文字語言は、著せざるをもって尚となす。たとえば鴆毒人にこれを飲すれば則ち死す、曹瞞これを飲めばすなわち害なからんが如し。学者の取捨いかんというにあるのみ。則ちこれは文を編んで行う。それ法門に於て補うことをなさず。ゆえにこれが為に書す。

とあって、大慧以後の学者は、諸尊宿の偈頌、仏事があれば、これを自分で録して、各々「雑毒海」としてこれにあてている、ということを書いている。[27] すでに正法眼蔵を附与されている印簡にとって、大慧の「禅宗雑毒海」はすでに閲しており、自らもこれに習って、著していることも当然であろう。とすると、前回の「寿上座」とは印簡の師、中和璋のことを指しているものと思われる。その死する時の秉炬の頌に、四相の姿も、生死を脱したところにありとの「寿上座」の思想を頌したものであろう。

九　むすび

印簡は元の太祖、太宗、定宗、憲宗の四代に亘る初王朝が中国仏教政策に大きな影響を与え、とくに五代目世祖の幼時からその潛邸にて師として敬された禅僧であった。幼にしてその素質の優れていたこと、儒学に通じ、さらに仏教に転じ、師中観沼、中和璋はともに臨済禅（楊岐派）に拘った学僧、修行僧であったのでその影響は大きかった。その幼少期の人格形成の指導僧の上に、さらに十三歳の時知遇した後の宰相史天澤に支持され、その仏教は大祖以来、被護をうけることになった。すでに金朝下の指導僧万松行秀が、その宰相耶律楚材の保護の下、大いに曹洞禅が保護され発展したが、つづいて蒙古の王朝の創草期にあたり、史天澤を通して印簡の意見の重要視される時代へと変った。とくに印簡の推薦した劉秉忠が、国事の重要顧問、枢密院の推進者（宋史巻五）となるや、印簡は正に国師として遇されるに至るのである。その行った政治への仏教の影響は、僧侶の学問推進（教講）と修行[28]による禅行（禅会）を行ったが、試僧をしても落第する者をなからしめたことは彼の意見であった。すでに至元元年（一二六四）に梵僧八合思八に、統釋教と玉印を与えて帝師[29]とし、太廟を祭る創めとしたが、同じく中国の漢人支配にも翌二年（一二六五）禅をもって「総統」として、教禅を統括[30]せしめ、三年（一二六六）には、「僧道に勅して中都寺観に国家王朝祈福せしめ、僧機を総統として慶寿寺に居らしめ」（元史巻第六世祖）同時に「慶寿寺と海雲寺に

土地を五〇〇頃を贈与（元史巻第四世祖項）したりして、燕京中都を中心に仏教保護にする整備が着々とすすんでいったのであった。とくに印簡の儒教思想による蒙古の漢地統治の必要性を強調し、その基本に仏教とくに禅思想による強弱、剛柔の使い分けは、弟子劉秉忠の執政によって一そう明確となっていった。

五台山への皇后の為の祈福もその信仰と念力を示す重要なことであったが、憲宗四年（一二五四）の太后への招請に京の和林へ向う途中、病気となり、招請に応じられなかったが、宮廷内における信仰も絶大であったことも見逃すことはできない。

彼の得た禅思想は、師僧とくに中和璋が、大慧宗杲の提唱していた正法眼蔵の眼目、日常教話（雑毒海）などの影響も大であったことを想起せしめ、南宋にはこれが同派における官人、信者層に具体的実行をとらせるに至った看話禅と思われる対話、理解、説得の方法であって、これはやがて中国の対蒙古主戦派・国粋派に大きな影響を与えるに至った。しかし華北に残った印簡の禅風は、具体的には、漢人支配への信仰の従来通りとし、さらに僧侶の質の向上、すなわち、教学の向上と禅行の確立と相まって、その僧侶らの徳の向上をめざし、それらがさらに仏教による保護者祈福する力を増大せしめ、民を安堵安定せしめることが最大の目的となっていったのである。

印簡はそれらについて、とくに元初の指導者武人史天澤と枢密官人劉秉忠を自己最大の支持檀越者とし、蒙古の漢人支配を困乱なからしめた影の仏教保護、功労者でもあった訳であり、かつ華北禅宗の発展者でもあったのである。

註

（1）拙稿「万松行秀伝と湛然居士集—金代曹洞禅の発展—」「中国禅宗史研究」研文出版　第三篇中

（2）拙稿「普陀山信仰と禅宗—中国曹洞宗庶民信仰への展望—」東洋教育史研究第十一集　一九八七・十二

（3）念常の「仏祖歴代通載」は、全て二十二巻であるが、「縮刷大蔵経」昭和十一年十月十日刊では三十六巻に分れている。ただし内容は同じ。海雲印簡の項目は、新修大正大蔵経（昭和二年八月刊では第二十一巻、縮刷大蔵経では第三十二巻にあてられている。とくに宋から遼金元代初、中期に至る史伝は史料価値が高いものが多い。

南宋	金元	事項
寧宗嘉泰2年（壬戌年）	金章宗泰和2年（一二〇二）	印簡山西寧遠に生る。史天沢生る。 万松行秀36歳、南宋松源崇岳死。
寧宗開禧3年（丁卯年）	蒙古太祖2年（一二〇七） 金承安7年	印簡7歳、「孝経」を学ぶ、伝戒顔が印簡に「草菴歌」を授く、中観沼に礼す。
寧宗嘉定元年（戊辰年）	蒙古太祖3年（一二〇八）	印簡8歳、「三帰五八十善戒法」を受く。
寧宗嘉定2年（壬申年）	蒙古太祖7年（一二一二） 金崇寧2年	印簡11歳、蒙豫王より納具を下賜。洪彦上座と問答。
寧宗嘉定7年（丙子年）	蒙古太祖9年（一二一四） 金昇王貞祐元年	印簡13歳、ジンギス汗の寧遠にて親遇し、僧侶の安全を約す。
寧宗嘉定9年（丙子年）	蒙古太祖11年（一二一六） 金昇王貞祐3年	印簡15歳、劉秉忠生る。
寧宗嘉定12年（乙卯年）	蒙古太祖14年（一二一九） 金興定3年	印簡18歳、嵐城陥落、中観沼と北帰決意、史天沢・李七哥と逢う。 ジンギス汗中観沼を黄犢軽車に乗せ召く。
寧宗嘉定13年（庚辰年）	蒙古太祖15年（一二二〇） 金興定4年	印簡19歳、師中観沼73歳死。 万松行秀55歳。 この年以後大慶寿寺にて中和璋に師侍す、興州仁智寺より浹陽の興国寺、興安寺のちの永慶寺を経て31歳燕京の大慶寿寺に戻る。
理宗紹定4年（辛卯年）	蒙古太宗3年（一二三一） 金哀宗正大8年	印簡30歳、十一月合罕皇帝より宣賜、このころ大慶寿寺数僧との問答あり、 万松行秀66歳「請益録」を芸述す。

理宗紹定5年（壬辰年）	蒙古太宗4年（一二三二） 金哀宗天興元年	昂商31歳、劉秉忠令史を辞めて天寧虚照につき、のち雲中南堂寺に住し、こののち何年かの時に印簡と逢う。
理宗端平元年（甲午年）	蒙古太宗6年（一二三四） 金哀宗天興3年	印簡33歳、李守賢46歳死。 金朝滅亡す。
理宗端平2年（乙未年）	蒙古太宗7年（一二三五）	印簡34歳、 万松行秀「万寿語録」著述す。
理宗端平3年（丙申年）	蒙古太宗8年（一二三六）	印簡35歳、忽都護大官に人臂に印識するを止めしむ。
理宗嘉熙元年（丁酉年）	蒙古太宗9年（一二三七）	印簡36歳、正月太祖皇帝二皇后より光天鎮国大士号を賜わる。
理宗嘉熙3年（己亥年）	蒙古太宗11年（一二三九） （脱列哥那元年と称す）	印簡38歳、大慶寿寺に再入寺す。
理宗淳祐2年（壬寅年）	蒙古太宗14年（一二四二）	印簡41歳、護必烈大王に法要説法す。
理宗淳祐3年（癸卯年）	蒙古太宗15年（一二四三）	印簡42歳、耶律楚材54歳死。
理宗淳祐4年（甲辰年）	蒙古太宗16年（一二四四）	印簡43歳、護必烈大王より師に珠笠を賜る。
理宗淳祐5年（乙巳年）	蒙古太宗17年（一二四五）	印簡44歳、太皇后・五台山に祈福す。
理宗淳祐6年（丙午年）	蒙古定宗元年（一二四六）	印簡45歳、定宗立つ。 万松行秀81歳死。
理宗淳祐7年（丁未年）	蒙古定宗2年（一二四七）	印簡46歳、貴由皇帝即位す、印簡統僧となる。白金万両下賜、昊天寺にて国祈福大会。
理宗淳祐8年（戊申年）	蒙古定宗3年（一二四八）	印簡47歳、定宗死す、皇后年号を失す。
理宗淳祐11年（辛亥年）	蒙古憲宗元年（一二五一）	印簡50歳、再び天下僧事を領す（釈教）僧の差役免ず、（旧制に戻る）、西域僧那摩を国師とす、昊天寺に国家祀福す、のち何れの年か和林（山西省）の太平興国寺に住す。

理宗宝祐4年（丙辰年）	蒙古憲宗6年（一二五六）	印簡55歳、正月昊天寺建会、旭威列大王、印簡に法語を求め布施す。
理宗宝祐5年（丁巳年）	蒙古憲宗7年（一二五七）	印簡4月4日、56歳死、仏日円明大師と諡さる。
理宗景定2年（辛酉）	蒙古世祖中統年（一二六一）	慶寿寺、海雲寺に陸地五〇〇項賜る（宋史巻四）
慶宗咸淳2年（丙寅年）	蒙古至元3年（一二六六）	万松行秀弟子仏国至温51歳死。
慶宗咸淳8年	蒙古至元8年（一二七一）	劉秉忠の提言にて蒙古国号を「元」と改める。
慶宗咸淳10年（甲戌年）	蒙古至元11年（一二七四）	劉秉忠59歳死。
恭宗徳祐元年	蒙古至元12年（一二七五）	史天沢74歳死。南宋文天祥起兵す。

（4）「仏祖歴代通載」巻第二十一同伝に「一日扶中観行、観曰、法燈禅師、道看他家事忙、且道承誰力、汝作麼生会、師将中観手一掣、観曰、這野狐精、師曰、喏喏、観曰、戒須別参」とあり、中観の教えに対して「喏喏」としたという。若年の時ではあっても素直に師の言に従う様子が感ぜられる。

（5）同右同巻

（6）「仏祖歴代通載」巻第二十一、あるいは「継燈録」巻六にいう「中観沼禅師、海雲印簡之受業師也、嘗訓海雲、曰汝所欲者、文字語言耳、向去皆止之、令身心若枯木苑灰、今時及尽功用純熟犬死一場、休有余気、到那時節、瞥然自省、方可與吾相見、後同海雲、為元兵所刼」とあるところをみると、教化の内容から、臨済宗か、雲門宗のような雰囲気に感ぜられる。

（7）「金史」巻第九十九

（8）「新元史」巻第一三八・史秉直伝

（9）「元史」巻第一四七・史天倪伝

（10）「元史」巻第一四七・史天安伝

（11）「元史」巻第一五五・史天澤伝、「新元史」巻一三八・史天澤伝

（12）「元史巻第一一九木華黎伝」、「新元史」一一九木華黎伝

（13）「金国移都燕京、勅建大慶寿寺成、詔請玄冥禅師顗公開山第一代皇子燕主降、香賜銭二万沃田二十項」（仏祖歴代通載巻第二十）一一九木華黎伝

(14) 「継灯録」巻二　容菴海禅師法嗣燕京慶寿中和璋禅師では「師（寿）曰吾此処別、雲（師）曰如何表信、師（寿）曰牙是一具骨、耳是両片皮、雲（師曰将謂別有一寿（師）曰錯、雲（師）喝曰……と師と寿が替り、雲は師と同じ。

(15) 「元史」巻第一四六列伝巻三十三同伝

(16) 「仏祖歴代通載」巻第二十一同伝

(17) 「仏祖歴代通載」巻第二十一同伝

(18) 「仏祖歴代通載」巻第二十一同伝

(19) 「仏祖歴代通載」巻第二十一同伝

(20) 「仏祖統記」巻第四十八元の項

(21) 「仏祖統記」巻第四十八元の項

(22) 印簡が慶寿寺より興州（山西省）仁智寺に住し、さらに淶陽の興国寺、興安の永慶寺の全国諸寺を巡り、最後に中京燕京の大慶寿寺に戻り住したのは、少くとも三十一歳前のことと思われる。年譜参照。

(23) 「打野糎（やき）」とは「山野を野焼したあとに残る焼け材をたたく」ことをいう。野良に出て焼けぼっくいを掘っている時のように何と口やかましいとの意（碧巌録四八）、「禅語字彙」今井福山校、中川渋庵著、森江書店刊

(24) 大慧宗杲「正法眼蔵」三巻、序

(25) 「雑毒海」は又は「禅宗雑毒海」ともいう。大日本経蔵には「禅宗雑毒海」八巻として編掲し、康熙甲午夏六月すなわち清の聖祖康熙五十三年（一七一四）に古柏林寺沙門性音が重編し叙文を書いたものがあるが、これより前、洪武十七年(明太祖、一三八四)に前の鞔峰比丘無慍が、編集したものが古く、両者の中には内容編集に若干の違いがあるが、今洪武十七年無慍編（駒沢大学蔵大学林文庫による）では、大慧宗杲の所説を宏首座が書き、龍山沙門祖闡がすでに重編しているものを説いたものである。内容は

巻一、仏誕、成道、出山、涅槃、観音、維摩、草衣文殊

巻二、布袋、初祖、二祖、三祖、四祖、五祖、六祖

巻三、衆讃

巻四、衆塔、示徒、悟道

巻五、贈送

巻六、寄別、抄化

巻七、襍題
巻八、雑詠
巻九、道号
巻十、山居雑言、山門、仏殿、指座、拠室、鎖龕、起龕、秉炬、入塔

(26) 「秉炬」は禅の特別用語にては「ヒンコ」とよむ。下火をとって茶毗にすること。葬式の時火をとるかかりに赤紙を書き、あるいは朱を塗ってこれに代用す。

(27) すでに牧田諦亮氏が「程鉅夫撰海雲簡和尚塔碑（雪楼集六）を掲げ、「雑毒海」を印簡も著していることをのべている。（アジア史歴史事典平凡社印簡項参照）

(28) 「元史」巻第六世祖に、「詔諭総統、所僧人通五大部経者為中選、以有徳業者、為州郡僧録判正、副都綱等、官仍於各路設三学講三禅会」世祖、至元二年（一二六五）二月の項

(29) 「元史」巻第四、世祖項

(30) 前述（28）「元史」巻第六、世祖の項参照